

年間第27主日 10月2日 分かち合い

ルカ 17-5～10

今日のみ言葉には、「信仰」という言葉が繰り返し出てきます。福音では、使徒たちが「わたしどもの信仰を増してください」とイエスに願い、第一朗読のハバククの預言では、「神に従う人は信仰によって生きる」とあり、第二朗読では、パウロは、愛するテモテに「信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい」と記しています。

洗礼によって、信仰をいただいてわたしたちは、皆、神を信じて生きるものとなりましたが、どこかで、自分の信仰が弱く、不十分で、中途半端だと感じています。「信じます」と言いながら、神の力よりも、自分の力を信頼して、生きていると感じることが少なくありません。「信仰」はわたしたちキリスト者の根本的な姿勢であり、「信仰」こそが、わたしたちを人々との違いを特徴づけるものであるはずですが、実際は、それほど確信をもって、「そうだ」と言えないのが現実ではないでしょうか。

ルカ福音書の中で、使徒たちはイエスに、「わたしたちの信仰を増してください」と願います。直前に出る話では、ゆるしのことがテーマになっています。日に七回でも、「悔い改めます」、と言ってくるなら、「ゆるしてやりなさい」、というのがイエスの教えです。そんなことができるか、という思いが、使徒たちの質問になったのかもしれませんが。それに対してイエスは、「からし種一粒ほどの信仰があれば、桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くだろう」、とされます。「山を動かすほどの信仰」という言葉もあります。それは、信仰の大きさではなく、信仰があるかないか、信じるか信じないか、の問題だと言っておられるようにも受け取れます。つまり、信仰というものは、条件づきではなく、手放しで、無条件で、自分を全面的に神の力に委ねることだと、言うておられるようにも、受け取れます。

第一朗読の『ハバククの預言』は、紀元前7世紀、ユダ王国の末期に活躍した預言者の言葉とされていますが、今日、あえてこの個所が選ばれたのは、最後の言葉、「神に従う人は信仰によって生きる」のためではないでしょうか。この言葉は、新約聖書、特に、聖パウロの手紙に引用されたことで、有名になりました。パウロが、その深い神学的洞察を展開した『ローマの教会への手紙』の冒頭で、彼は言います、「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は、信仰によって生きる』と書いているとおりです」(ローマ 1.17)、と。その後の章やガラテヤの教会への手紙でも、繰り返し、この言葉「信仰」に触れていますが、それは、ユダヤ人が何よりも大切にしてきた「律法」の行いと対比して語っているのです。ユダヤ人は、律法を守り行うことによって、神を喜ばすことができる、神の義を得ることができる、神によって救われると信じてきました。しかし、パウロは、その大前提を否定し、人が救われるのは、律法の行いではなく、主イエス・キリスト、し

かも、十字架で亡くなられたイエスを信じることによるのだと主張するのです。律法を知らず、律法を守ることのできないユダヤ人以外の人々、異邦人が救われるのは、まさに、主イエスへの信仰によることをパウロは力説するのです。プロテスタントの信仰を大きく発展させたルターの思想も、実は、この点に根拠を置いているのです。

キリスト者は、律法の行いではなく、もっぱら、主イエスへの信仰に生きるものと言われますが、はたして、律法に代わって、教会の中で行われる様々な善行、奉仕、献身、正しい生き方（祈り、秘跡、ミサへの参加、献金等）によって救われる、と思っていることはないでしょうか。「信じます」と言いながら、どこかで、自分を守り、自分の都合や条件に合わせて信じようとしていないでしょうか。リスクを取らず、安全第一で生きようとするなら、信仰の入る余地はありません。自分の行いではなく、罪深い自分を救おうとされる神への信仰によって救われることを確信し、自分の正しさを保証するものを手放し、無条件で、神の愛に自らを委ねる生き方ができますように、祈りましょう。それこそが、信仰者としてのわたしたちに求められていること、人々が暗にわたしたちに期待していることです。神ご自身がわたしたちに望んでおられることです。(S.T.)